

「繁殖性」と「無限の時間」

——『全体性と無限』における平和論

佐藤香織

序 問題の所在 ——レヴィナスにおける「平和」の問い

レヴィナスは、主著『全体性と無限——外部性についての試論¹』（1961）の冒頭で、存在することの本義を戦争に見いだす思考を問いに付す。たとえばハイデガーにおいては、「存在」は「戦争」であるとみなされる²。そのように考えた場合、平和は存在しないものであり、平和と呼ばれる状態は単に見かけ上のものにすぎないということになるだろう。いわば、平和は戦争の部分的な概念でしかないことになる³。

¹ 以下のレヴィナスの著作については、本文中に略号を示す。

AE : *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*, Livre de Poche, 2004 (Kluwer Academic Publishers, 1974).

DL : *Difficile liberté. Essais sur le judaïsme*, troisième Edition, Albin Michel, Paris, 1976.

EDHH : *En découvrant l'existence avec Husserl et Heidegger*, Collection bibliothèque de la philosophie, 2002 (J.Vrin, 1967).

LC : *Liberté et commandement*, préface de Pierre Hayat, Fata Morgana, 1994.

TA : *Le temps et l'autre*, Fata morgana, 1979, sixième édition « Quadriga », 1996.

TI : *Totalité et infini. Essai sur l'extériorité*, Paris, Poche Essais, 1990 (Martinus Nijhoff, 1961).

² 「戦い (polemos)」を万物の起源とみなすヘラクレイトスに言及する際に、レヴィナスはハイデガーの『形而上学入門』の第二章第一節「『存在』という名の文法」も念頭に置いていることだろう。ハイデガーは、存在者が生じるためには相互の分離と統一がなければならないということを指摘し、ギリシア語における「ロゴス (ことば)」の意味を「とり集め (Sammlung)」に見いだしたうえで、ヘラクレイトスにおける「ポレモス」を「ロゴス」と解釈した。また彼は「存在」に存する根源的な「闘争 (Kampf)」と「人間的な仕方による戦い (Krieg)」を区別した。このとき、「ポレモス」は「根源的な闘争」であると考えられている。(Martin Heidegger, *Gesamtausgabe II. Abteilung : Vorlesungen 1923-1944, Band 40, Einführung in die Metaphysik*, Klostermann, Frankfurt am Main, 1953(1976), p. 66)。

³ こうした思考は政治哲学において広く認められている。「[...] 戦争の本性も、実際の闘争にあるのではなく [...] 闘争への明らかな志向にある。そのほかのすべてのときは、平和である」(ホッブズ『リヴァイアサン』第十三章。The English works of Thomas Hobbes, Vol. III, p. 113)。戦争と平和の関係についての哲学史的な理解については、Christopher W. Morris, « Guerre et Paix », in *Dictionnaire d'éthique et de philosophie morale, tome 1*, sous la direction de Monique Canto-Sperber, PUF, 1996, pp. 799-808. を参照した。

平和が到来したかに見える状態——条約の締結や休戦状態——も実際には戦争の一状態なのである。「戦争の結果生まれた諸帝国の平和なるものもまた戦争に立脚している」(TI, 6)と述べることによって、レヴィナスは戦争に基づく平和とは異なる意味での「平和」⁴について語りだそうとしている⁵。平和が戦争の部分概念であるという考えとは逆に、彼は「平和」が戦争に対して根源的であるとするのである⁶。

しかし、レヴィナスによる「平和」の定義は必ずしも自明ではない。というのも『全体性と無限』において「平和」という主題は異なる二つの文脈のもとに現れるからである。第一に、この著作の第三部において、「平和」は言語的關係——〈自我〉と〈他者⁷〉の「対面」という出来事——に存するとレヴィナスは述べる。「戦争」に対する「平和」の根源性についての議論もこの部分に属している。第二に、「善性としての存在、〈自我〉、多元性、平和」という副題を持つ同書の結論部の最終節において、彼は第四部の中心的なテーマのひとつである「繁殖性 (fécondité: 生殖、多産性)」の問題と「平和」を結びつけている⁸ (TI, 342)。この箇所では彼は〈他者〉の創出および諸世代を介した関係の分析を通じて思考される「無限の時間」を「平和」として論じている。この二つの文脈に登場する「平和」を、いかに整合的に解することができるか、ということが問題として残っている。

それでは、『全体性と無限』の平和論にいかにして接近することが可能だろうか。この問いを踏まえ、本稿は、『全体性と無限』における「対面」および「繁殖性」

⁴ 以下、レヴィナスが用いる意味で本稿が「平和」という語を用いるとき、「」を用いて表記する。

⁵ 『全体性と無限』における「戦争」概念は二義的である。序文においてレヴィナスは「戦争」は「純粋な存在をめぐる純粋な経験」というかたちで生起する (TI, 5) と述べる。そうした観点からは「戦争」と「全体性」は同一視される。しかし、第三部においてレヴィナスが「戦争」を人間どうしの対立構造を示すものとして論じるとき、「戦争」は「全体性に対して外部的な諸存在のあいだの関係」(TI, 246)であったこと、「戦争」を「全体性」とみなす見方が実は不可能であったことが証される。

⁶ 別の箇所では「平和」は「倫理」とも呼び直され、「倫理」が「戦争」に先立つということが述べられる。「倫理的関係は、諸々の自由の対立、戦争——ヘーゲルによれば戦争が歴史を創始します——に先立つものです」(DL, 34)。

⁷ 本稿においては、Moi, Autrui, Autre をそれぞれ〈自我〉〈他者〉〈他〉と訳す。小文字の autre のうち内容に関わるものについては、「他なるもの」と表記する。〈他者〉は、〈自我〉に対して現れる人格的他者、すなわち他人を示すものとする。また、〈他〉は「他者」の他性を示すものと理解する。しかし、両者の弁別はしばしば困難であることを注記しておく。

⁸ 本稿は扱わないが、『全体性と無限』序文における、「歴史の彼方」の「平和」としての「終末論的なもの」(TI, 7)については、「死」と「繁殖性」についての分析を起点としての考察が可能であろう。

に基づいて論じられる「平和」の内実と両者の関係を明らかにすることを目論む。まず、『自由と命令』（1953）を分析しながら、レヴィナスにおける「平和」が〈自我〉の「自由」の創設に由来していることを確認する（第一節）。次いで、『全体性と無限』においてレヴィナスが考察する「対面」の議論を再検討する。この分析において、「平和」という問題が基づく時間論的視座の問いを提起する（第二節）。最後に「繁殖性」に関する時間の問題から「平和」の意味を考察する（第三節）。

1 「平和的対立」の内実——『自由と命令』

レヴィナスにおいて「平和」という問題が「倫理」の「政治」からの区別と深く関わっていることは、レヴィナス研究としては初期の1980年代の前半に既に指摘されていた⁹。レヴィナスの思考において「倫理」が「政治」から区別されること、そして「平和」が政治上の問題に還元され得ない「倫理」に属することは、いかなる意味を持っているのだろうか。

レヴィナスが「倫理」と「政治」の關係に着目しつつ「平和」を巡る独自の思考を明確に論じ始めたのは1950年代である。「自由と命令¹⁰」（1953）において彼は、圧政ではない政治的秩序が生じるためには「理性に先立つ理性」（LC, 36）が必要なのではないかと問いをたてた。彼は圧政と政治を区別する際に、理性によって実現される政治的秩序と自由の關係に着目する。

この論考において、一方で自由は、「ある行為を蒙ることを拒絶すること」（LC, 30）として考えられている。こうした自由は意志の自由に属する。自由を非制約として考えるのみでは不十分である。自由であることは、他によって動かされることを自ら拒むことだからである。それに対して、命令は、「一箇の意志に働きかけること」（TI, 29）、すなわち自らとは他なる意志主体を動かすことに存している。したがって、自由であることと命令に従うこととは相反する。

⁹ 「非常に若くしてレヴィナスは戦争と平和という問題に直面する。平和の維持は、彼にとっては、軍事的、政治的、経済的な問題ではなくて、倫理的な問題のように思われる」（Stephane Strasser, “Emmanuel Levinas”, in Herbert Spiegelberg, *The phenomenological Movement*, Matrinus Nijhoff Publishers, The Hague, 3. Ed., 1982, p. 613）。

¹⁰ 「自由と命令」は、まず『形而上学・倫理学雑誌』に1953年に発表され、「超越と高さ」（1962）とともに1994年に一冊の本として出版された。

他方で、レヴィナスは命令の受け入れとして自由を思考する。彼が最終的に自由を確立するための条件として提示するのは、「制度に先立つ命令」(LC, 43)であり、かつ「圧政なき関係の最初の事態」(LC, 46)としての「命令」である。この自由をどのように解すればよいだろうか。

暴君による圧政下の状況を考えてみよう。たとえ暴君によって虐待されているとしても「思考の自由」は保つことができると述べる人もいるかもしれない。しかし、こうした状況において「思考の自由」は圧政に従属するものとして、すなわち被支配下での抵抗として生じている。また、人は圧政の恐怖に直面して、服従を受け入れてしまうことがある。「服従が服従することの意識であることをやめるとき、服従が性向となると、真の他律性が始まる」(LC, 32)。こうした状況に置かれた主体の自由は圧政に屈することになる。その一方で、圧政の主体としての暴君は「あたかも自分ひとりしかいないかのように」(LC, 37)、すなわち、あたかも自らに外的なものが不在であるかのように存在する。レヴィナスは、こうした暴君の孤独を「自由」と呼ぶことも拒否する¹¹。

圧政の恐怖を避けるために人は制度を設立し、暴君の恐怖といった自由に対する脅威を法によって取り除こうとする。「自由は自らの外部に理性の秩序を構築することに存する」(LC, 33)。法および制度の意義は「自由の保証」にある。すなわち、政治的秩序は暴君による自我中心主義の肥大化から自由を守る。「自由の至上の営為は自由を保証することにある」(LC, 34)。このことから、成文法あるいは制度は「自由の条件としての命令が政治的形態のもとでまとう姿」(LC, 34)であることが帰結する。政治的秩序は人間の自由を保証する「非人称的理性」(ex. LC, 35, 47)によって構築されている。「理性」は誰にでも妥当しうる普遍性を目指すがゆえに非人称的なのである。

このような「非人称的理性」を起点として自由が生じるとはレヴィナスは考えていない。「非人称的理性」において、すなわち法や制度の秩序の中で、互いに自由な主体どうしが向き合っている。しかし、自由の生起という事態は自由の衝突に先

¹¹ 同時期にあたる1954年に、レヴィナスは「暴力」について以下の内容を述べたノートを残している。「暴力——自分がたった一人であるかのように行為するとき？いや、一人の他者が——しかも自由なものとしての他者がいなければならない。暴力は二元性を前提とする。たった一人であること——自由でも、非自由でもない」(Emmanuel Levinas, *Œuvres I, Carnets de captivité suivi de Écrits sur la captivité et Notes philosophiques diverses*. Volume publié sous la responsabilité de Rodolphe Calin et de Catherine Chaliel, Paris, Imec / Grasset, 2009, p. 420)。

立っているのではないか。レヴィナスはこのような問いをたてた (LC, 36)。彼によれば、「対面」は自由な主体の間での対立を意味するのではなく、自他の間には諸力の敵対関係とは異なる関係が生じている。

私が言いたいのは、この対立が、私の自由と衝突しつつあらわになるのではないということだ。この対立は私の自由に先立ち、私の自由を作動させる対立である。私がそれに対して対立するところのものではなく、私に対して自ら対立するところのものなのだ。(LC, 39)

レヴィナスは、自由の起源を理性的秩序に見ることをしないが、逆に理性的な政治的秩序の起源を自由な諸存在者どうしの対立の調停に見ることもない。彼にしたがえば、「私が他の存在たちと合理的世界を構築するに先立って、その存在たちは一箇の意味 (sens) を有している」(LC, 45)。「意味を有する」ということとはどういうことなのかここで考えてみよう。

レヴィナスは、提示された記号が指示されたものの内容を表すということに意味の原初的なあり方を認めてはいない。また、彼は「意味を有する」ということを主体による意味付与作用 (Sinngebung) に還元することをしない¹²。記号を用いるためには、記号がどのような指示体系のうちに位置づけられているのかということに対する理解が必要である。たとえば言語記号が成立するためには、ある語や文がある言語の文法にのっとっていることが必要である。このとき、ある語や文が有意味であることを保証するのは文法体系である。しかし、秩序だった文法体系において言葉が有意味であるということは、誰かが誰かへと言葉を差し向けることを前提としている。言い換えるならば、言語記号に基づく言葉の有意味性は、対話へ参入するように誘う呼びかけに導かれているのだ。「表出 (expression) は、誰かについて語るのではないし、共存に関する情報でもない。表出は、知識に加えてある態度をとらせるものでもない。表出は、誰かある者に話しかけるよう誘うのだ」(LC, 42)。「呼びかけ」に応答することは、自らにとって外的な存在者に従うことである。それゆえレヴィナスはこの「呼びかけ」を「命令」と呼ぶ。しかし、この「命令」は自我の自由を制限することも、何らかの行為を強制することもなく、呼びかけられた者

¹² 「意味付与に先立つこの意味」こそ、レヴィナスが自由な諸存在者の間に見いだすものである (LC, 45)。

を「対話」へと招く。呼びかけられた者が「呼びかけ」に応じることではじめて自由な主体どうしとして互いが言葉を交わしうる。

こうして、人間的関係において原初的な「意味」が生じるとレヴィナスは考える。この原初的な「意味」は、諸々の意味を保証する法や制度に依拠することはなく、法や制度に先行し、それらを有意味なものたらしめる。人は法や制度に従うよりも先に「対話」へと相手を導く言説としての「呼びかけ」(LC, 42)に応答している。それゆえレヴィナスはこの「呼びかけ」を「理性に先立つ理性」と名付ける。また、「呼びかけ」が自我の自由に先立ち自我の自由を作動させる自他関係を彼は「平和的対立」(LC, 39)と呼ぶ。「対立」が「平和」であるのは、単に「対立」が暴力を伴わないからではなく、「対話」によって創設される関係が「政治的なもの」を可能にしているからである。こうして彼は政治的および理性的秩序が要請される根拠を「倫理」に見いだす。

『自由と命令』の発表以降、レヴィナスは政治に還元しえない人間的関係として「倫理」を提示し、後年に至るまで「政治」と「倫理」の関係についての思考を紡いでいく。諸著作に共通して、レヴィナスは政治の領域における諸概念を可能にする条件としての「倫理」を「平和」とほぼ同義とみなしつつ探求する。自他関係は根源的に「平和」であるというレヴィナスの主張を『全体性と無限』の読解を通じてさらに検討したい。

2 「対面」における「平和」

2-1 「対面」の根源的性格

『全体性と無限』が、自他の直接的関係すなわち「対面」を根源的な「平和」と呼ぶ¹³のは、どのような意味においてであろうか。同書第三部B第二節「顔と倫理」でのレヴィナスの言葉を確認しよう。

戦争は平和を、アレルギーなきあらかじめの〈他者〉の現前を前提している。
戦争は出会いという最初の出来事を記すことはない。(TI, 218)

¹³「対面」と「平和」という論点について、『自由と命令』および『全体性と無限』はほぼ同じ態度をとっている。ただし、『全体性と無限』においてレヴィナスは、『自由と命令』とは異なり、「歴史のうちで実現される非人称的理性の存在論」(TI, 342)において諸人格が不在であることを糾弾する。

レヴィナスが論じる「アレルギーなき関係」は、〈他者〉の排除に基づくことなき関係である。自我による掌握を逃れゆくとともに自我に対して働きかける〈他者〉の意味作用が「対面」において生じている。よく知られているように、レヴィナスはこの意味作用を「顔」と呼んだ。

先に、『自由と命令』の分析において、自由は「対面」における「呼びかけ」の聴取によって創設されることを確認しておいた。換言すれば、自由はその起源において他律的であるという逆説的な事態が生じている¹⁴。レヴィナスは『全体性と無限』において、自我の自由の創設の他律的あり方を「責任」概念を導入しつつ語り直す。ここで述べられている「責任 (responsabilité)」はしばしば「応答可能性」と訳され、「対面」という出来事において〈他者〉との関わりへと不可避的に入っている〈自我〉のあり方を示す。「責任の次元」において「自由が不可避的に要請される」(TI, 219)。レヴィナスによれば、「呼びかけ」への応答を拒否していた存在者が「呼びかけ」に応答することは、自由が損なわれることを意味しない。応答は常に自発的になされる。「呼びかけ」は「応答しない」という自由を維持する存在者に対して、「応答する」ことで生起する自由——ただし、非自由を選択することの不可能な自由——を与えるのだ。レヴィナスは、こうした自由を、窮した者の訴えに応答せずにはいられないという状況から考える。この状況は単なる具体例ではない。というのも、彼は、訴えが「自我の善さを呼び起こしながら」(TI, 219) 自由を創設すると述べるからである。彼は、良心の生起の原初的あり方から出発して自由を論じているのである。

「責任」という概念を導入しつつレヴィナスがこの箇所ですべて述べていることは、『自由と命令』における自由についての議論の延長上にある。両著作において、〈他者〉による自我への呼びかけと自我からの〈他者〉への応答¹⁵が〈他者〉による自我の自由の創設の可能性を示している。言い換えるならば応答の主体としてこそ〈自我〉は自由な主体たりうる。「平和」についての思考は、自由の条件としての「責任」を思考することから始まる。

¹⁴ 『全体性と無限』においては、〈他者〉との関係における自由の創設が「他律 (hétéronomie)」として明示される (TI, 88)。

¹⁵ ここで述べる「呼びかけ」および「応答」は必ずしも発声に依拠しない。また、「拒否」や「無視」も「応答」となりうる。レヴィナスは論文「存在論は根源的か」(1951)で人間どうしの関係における「挨拶」の特権性を認めている。「人間的なものに対するどんな態度のなかにも、挨拶が——たとえそれが挨拶の拒否であれ——存在する」(*Entre nous. Ecrits sur le penser à l'autre*, Paris, Grasset, 1991, p. 19)。

2-2 「死」の存在論的側面

自我論の乗り越えとして、そして政治的秩序を導くものとして提示される「平和」は、具体的関係の謂いである「対面」において生じる。しかし、ここまでの整理には時間的な論点が欠けている。「責任」は単に〈他者〉による「呼びかけ」の都度に〈自我〉に対して生じるのではない。レヴィナスによれば、「責任」は「引き受けられるにに応じて増大していく」(TI, 274) のであり、しかも増大していく「責任」を自我が果たし終わることはない。自我の「自由」に関するここまでの説明からのみでは、「責任」の「増大」について、すなわち、時間的な変化を含意する運動としての「責任」について論じることができない。それでは、いかなる時間のうちで無限責任の運動が創出されるのか。

本節は、この疑問を考察するために、『全体性と無限』において自他関係が「時間」の問題へと開かれる場面に着目したい。第三部C四節「意志と時間、そして忍耐」の中で、レヴィナスは、死すべき時間的存在者である人間の「未来」への関わりを自他関係として論じる。

自我の自由は、自我が死すべき者であるかぎり奪われる可能性のもとにある。自我は自由を剥奪されるという未来に脅かされつつも、その未来を先延ばしにし続ける。「自由であること、それは暴力の脅威のもとで自分自身の失墜を予防するための時間を有することである」(TI, 265)。自我は自由であることを延命することで時間的存在者となる。

しかし、自由の剥奪という、自我にとっての「悪 (mal)」を先延ばしにすることのできないような「特別な状況」(TI, 265) もまた生じる。自我は身体的と言われる苦痛 (*souffrance dite physique*) を被る際、自らの意志によってこの苦痛を逃れることはできない。未来において生じるはずの自由の剥奪という事態が、現在において、主体の意志に反して到来してしまっているのである。それゆえ、苦痛に対して自我は極度に受動的である。この極度の受動性にもかかわらず、苦痛を被る自我はなお死に至るまでの時間を有している。したがって、時間を持つこと、言い換えるならば時間意識を持つことにおいて、苦痛の中でも自我は自由である。すなわち、自我は苦痛を被ることを通して、自由の喪失と自由の維持の両方を経験している。「苦痛によって、自由な存在は自由であることをやめるが、非自由と化したこの存在は依然として自由である」(TI, 266)。

苦痛を被り、死を待つのでありながら、自由な意識でもあるという〈自我〉の二

義的なあり方をレヴィナスは「忍耐 (patience)」と呼ぶ。「忍耐」は「被ることの受動性であるが、制御そのものである」(TI, 266)。忍耐する自我は自らによって死に至ることも、自らのために死に至ることもない。苦痛において自我は受動的なのである。苦痛は自我の意志とは無縁のところから到来する。こうして、自我は「忍耐」において自我中心性を失うことになる。しかし自我は忍耐のうちで、自我は苦痛を経た後の死とは異なる未来を希望として有している。忍耐する時間において、自我が「苦痛」を介して死に至る時間とは異なる時間へと参入する可能性が開かれるのである。

「忍耐」を論じる際にさらに注意を払わなければならないのは、「死」の二義的なあり方である。レヴィナスは「死」の二義性に関して『時間と他なるもの』(1948)の時期から論じていた。彼がマクベスの最期を引用する (TA, 60) ことから分かるように、質料として存在する自我に到来するという「死」の側面は無視されていない。「死」は、一方で身体的苦痛の延長上にあり、〈自我〉をその終わりへと至らしめる。しかし、他方で、レヴィナスは「死」の新たな存在論的側面を切り開く。「死」は自らにとどまり続ける権能を持ち続ける〈自我〉の終わりでもあって、この意味においては「死」には生命の終わりが必ずしも伴うのではない。「死」によって自我は「他なるもの」と関係することが可能になる。彼は、「死」を「他なるもの」とみなすこと、そして自我の「死」を〈自我〉と「他なるもの」との関わりとみなすことによって、〈同 (le Même)〉であることに存するのではない〈自我〉のあり方を開くのである。

私の孤独は死によって確証されるのではなく、死によって破られるのだ。すぐに言うておくが、それゆえに実存は多元的なのである。この場合、複数性は実存者の多様性のうちにはなく、実存することそれ自体のうちに現れる。(TA, 63)

〈同〉であり続ける〈自我〉は自らの自由を失う瞬間に〈同〉ではなくなる。すなわち、ある意味において「死」が〈自我〉に到来する。しかし、「死」の到来による〈同〉としての〈自我〉の喪失とともに、新たな時間への〈自我〉の参入が始まる。「死」のこうした二元的なあり方を同時に思考することは、『全体性と無限』までの射程を持つこの著作において、矛盾する試みではない。だからこそレヴィナ

スは、『時間と他なるもの』でなしたように、『全体性と無限』でもまた、死を論じる文脈において新たなものの産出に関わる「繁殖性」の次元を後に分析することを予告するのである¹⁶ (TI, 267)。

それでは、「繁殖性」についての議論は「平和」論としてどのような意味を持つのであろうか。次節においてこうした問いを検討することで「繁殖性」の議論を再評価する。

3 「繁殖性¹⁷」と「平和」

3-1 「存在範疇」としての「繁殖性」

「繁殖性」の議論は「他なるもの」と関係する〈自我〉が「いかに私であり続けるか」(TA, 85)という問いから始まる¹⁸。レヴィナスは「死」を〈自我〉の自由の失墜として論じていた。自由である〈自我〉は「権能 (pouvoir)」を持つものでもある。「権能」によって〈自我〉は外的な諸対象を觀念に転換する。〈自我〉は諸

¹⁶ 本稿には関わらないが、「死」から自他関係を導く議論については、『時間と他なるもの』と『全体性と無限』の間に無視し得ない差異がある。レヴィナスは、1940年代後半には「エロス」を自他関係の問題の中核として論じていたが、『全体性と無限』では「倫理」と「エロス」を峻別する。

¹⁷ これまでの研究において「繁殖性」の問題は「平和」の問いとして直接的に論じられることが少なかった。その理由は、「繁殖性」という概念が孕む困難にある。レヴィナスにおいて「繁殖性」についての議論自体は『全体性と無限』以降は表向き消失する反面、「倫理的なもの」と「政治的なもの」との区別は先鋭化される傾向にある。また、「繁殖性」についての議論は、「平和」についての議論としてよりもむしろ、「女性的なもの (le féminin)」との関連において論じられることが多い。(Cf. Gérard Bensussan, « Fécondité d'Eros. Équivoque et dualité » dans Danielle Cohen-Levinas, *Lire Totalité et Infini d'Emmanuel Levinas. Études et interprétations*, Éditions Hermann, 2011, p. 91-106, Paulette Kayser, *Emmanuel Levinas : la trace du féminin*, Paris, PUF, 2000, Jean-Luc Thyse, *Eros et fécondité chez le jeune Levinas*, Paris, L'Harmattan, 1998)。本稿も、「女性的なもの」と「繁殖性」の結びつきを軽視することは決してできないと考えつつ、『全体性と無限』における「平和」は「繁殖性」についての思考ぬきには成立しえない議論であることに焦点を当てる。

¹⁸ 本節では、「繁殖性」の議論のうち『全体性と無限』第四部と『時間と他なるもの』に共通する部分を分析する。「繁殖性」についての議論はレヴィナスの捕囚時代に準備され戦後発表された『実存から実存者へ』(1947)および『時間と他なるもの』に遡り、『全体性と無限』の議論には戦後諸著作で書かれた文章の重複が見られる。また、『全体性と無限』第四部の「繁殖性」についての議論の一部は、論文「多元性と超越」(1949)をほぼそのままの形で取り上げている。そのため、『全体性と無限』の「繁殖性」について論じる場合には、まず、『全体性と無限』の記述とともに1940年代後半の議論を考慮することが必要である。さらに、この戦争直後の議論が、言語的關係の分析に基づく「倫理」に支えられている『全体性と無限』において再び取り上げられたことの意義を検討することもまた必要である。

対象を観念として表象し、自らに対して現前させることができる。それゆえ「権能」は「自我の観念に解消される定めにある世界内での現前」(TI, 299)と定義される。〈自我〉は権能を持つことによって、すなわち「他なるもの」を〈自我〉へと回収することによって自同性を保つ¹⁹。「死」はこうした自同性の喪失であり、権能を持つ〈自我〉の終わりである。権能を失うことで〈自我〉は「自己へと不可避的に回帰する自我」(TA, 85)ではなくなる。しかし、彼は「死」を介してなお「〈自我〉が〈自我〉であり続ける」状況を探る。いまやレヴィナスは、生物学的事態としての繁殖に汲み尽くされない「繁殖性」の構造を探ろうとしている(TA, 87/TI, 312)。「諸可能事に対する権能には還元不能な」(TI, 300)未来との関係から「繁殖性」を思考するのである。

一方でこの「繁殖性」には、質料として〈自我〉が存在することに関する問題が含意されている²⁰。「子(enfant, fils)²¹」は、〈自我〉の死後にもなお〈自我〉の産出したものとして存続する他の個体の存在を指している。

他方で「繁殖性」は「子を産む」という営みの質料的側面に限定されない独特な存在論的含意を有している²²。「繁殖性」は、他なる個体の産出という出来事を含意するのみではない。というのも、「繁殖性」の議論によってレヴィナスが提出しようとしているのは、不断の自己同定に存する〈自我〉とは異なる〈自我〉のあり方だからである。

レヴィナスは「父」と「子」の関係の分析を通じて、「息子に対する父の外部性、多元論的な実存すること」(TA, 87)を引き出す。「父」とは自らと異なる存在者を産み出す起源たる存在者の謂いであり、「子」とは「父」によって産み出された存在者の謂いである。「死」と「繁殖性」を通じて、「私(自我)は～である」の「である」に時間的な二重性が挿入される。〈自我〉はまず、自由な〈自我〉、「権能」

¹⁹ この意味での自同性は、繁殖性における二つの自同性のうちの一つにすぎない。

²⁰ 「繁殖性」は「他者を産み出す」ということの含意において質料的な側面を有している。本稿が扱うことをしない「女性的他者」との「愛撫」という感性的経験を介した他者との関わりがとりわけ「質料性」という問題に関わっていることから、感性的経験の問題は新たな局面を開いているということが読み取れよう。この論点に関しては、檜垣立哉「生殖と他者——レヴィナスを巡って——」(『実存思想論集 XXII レヴィナスと実存思想』, 実存思想協会, 2007年, pp. 29-50)を参照した。

²¹ 本稿は、レヴィナスが「父性」「息子」という語を選択したことに基づき、とりわけフェミニズムの立場から提起される問題を取り上げることにはしない。

²² 「自我の繁殖性は、それに相応しい存在論的価値をもつものとして評価されるべきだが、これまで一度もそのようなことはなされなかった」(TA, 87)。

を持つ〈自我〉であり、「子」の起源としての「父」である。すなわち、自由の剥奪、権能の失墜とともに「死」を迎える〈自我〉である。他方で、〈自我〉は「父」によって産み出され新たな時間を生きる〈他者²³〉すなわち「子」である。〈自我〉は新たな時間に入ることによって〈他者〉として主観性を維持するのである。「実存することはそれ自体二重化される」(TA, 88)。それゆえ、「私はある意味において私の子である」(TA, 86, cf. TI, 310)という表現は背理ではなく、二重の時間における〈自我〉のあり方を示している²⁴。〈自我〉が「子」を産出することとは、未来において〈自我〉が新たな〈自我〉となることである。〈自我〉は、自らとは異なる存在となり続け、いわば「子」となり続ける。このことは、「子」を産み出す存在である〈自我〉が瞬間ごとに「死」を迎えることに裏打ちされている。

「エレア派的な」存在の観念に従うならば、〈自我〉が自らの産み出した〈他者〉でもあることを描きだすことはできないだろう²⁵。レヴィナスによる「繁殖性」についての議論は、「エレア派的な」存在の構造とは異なる存在の構造を示している。〈自我〉は〈他者〉であるということについて論じることが、〈自我〉の存在の二義性を見いだすことなのである。「死」を通じてなお同じ〈自我〉であるということが、「エレア派的」ではない存在の観念、言い換えれば「繁殖性」における〈自同性〉に含意されている。「繁殖性」は、特殊な意味における〈自我〉の存在様態である²⁶。最終的に、レヴィナスは、「繁殖性」に「〈自我〉と自己との関係」(TI, 343)という輪郭を与えているのである。

以上から、「繁殖性」は「〈自同的なもの〉の二元性を含んでいる」(TI, 300)ということが理解される。〈自同的なもの〉とは、一方で、「権能」を持ち絶えず「他なるもの」を同化することで〈自我〉である存在者を指す。こうした意味での〈自同的なもの〉は「死」に際して〈自我〉であることをやめる。他方で、〈自同的なもの〉は〈他者〉であることによってなほ〈自我〉たる存在者を示している。

²³ 「子との関係」は「〈他〉との関係」と言い換えられ (TI, 300)、そうした場合、「子」の他性が問題となっている。その一方で、父子関係に存する「繁殖性」は「人間と人間との関係」(TI, 343)である。父子関係とは、「他者 (autrui) でありつつも […] 自分であるような異邦人との関係」(TI, 310)である。

²⁴ 『全体性と無限』において、「繁殖性」は「形式論理学では予期しえない構造」(TI, 299)として述べられることになる。

²⁵ 「私は～である」という表現は、ここではエレア派的もしくはプラトンの意味とは異なる意味を有している」(TA, 86 および TI, 310)。

²⁶ レヴィナスは、「繁殖性」を「存在論的範疇」(TI, 310)と呼ぶ。

3-2 「無限の時間」と〈自我〉

『全体性と無限』において、レヴィナスは序文から一貫して、「無限の観念」は、「無限」が有限者の思考を溢れ出る運動のうちに存していると考え。「このように思考をはみ出すことで、まさに無限の無限化が生起する。」(TI, 10) 彼によれば、「無限」はあらかじめ措定された存在者ではなく、〈自我〉の権能を超えゆく運動として生起するのであり、そうした「無限」が〈自我〉に対して観念として到来する。〈自我〉の思考を溢れ出る「無限」の「迎え入れ」(TI, 12) は〈自我〉にとって「不可能な要求」(TI, 12) である。こうした「不可能な要求」に応答することの意味を明らかにするのが、彼が『時間と他なるもの』において述べ、『全体性と無限』において維持した「繁殖性」の時間なのではないか。

〈他者〉でありつつもなお〈自我〉であるという〈自我〉の存在様態をレヴィナスが「無限の存在」(TI, 300) としていること、また彼が「繁殖性」について論じながら「無限の時間」を考察していることについて、検討したい²⁷。

無限の存在、言い換えるなら不断に再開する存在、不断に再開するがゆえに主観性を欠くことのできない存在、このような存在が繁殖性という様相のもとに生起する。(TI, 300)

死すべき存在である〈自我〉は有限である。しかし、「繁殖性」において〈自我〉は無限に存在する。「無限に存在すること」とは、「常に起源にとどまりつつも、みずからの実体を何の障害もなく刷新していく自我として生起すること」(TI, 301) であるとレヴィナスは説明している。起源としての〈自我〉と新たに産出された〈自

²⁷ 「繁殖性」の時間はメシア的時間とも呼ばれよう。メシア的時間においては、「過去」も「未来」もすべての時間が「現在」のうちにおいて一挙に現れる。『全体性と無限』出版と同時期、ユダヤ知識人会議で行われた発表で、レヴィナスはタルムードの解釈を行いつつ「メシアの到来はどの瞬間にも生じうる」(DL, 45) と述べる。また、こうしたメシア的時間の理解に関しては、ローゼンツヴァイク『救済の星』第二部の影響もあるだろう。ただし、レヴィナス自身が、『全体性と無限』の結論の手前で、彼が論じる時間構造をメシア性の問題系のもとで論じることは「本書の枠組みを超え出る問題であろう」(TI, 318) と述べている。また、「繁殖性」を論じる際に、レヴィナスは、ヘーゲルの初期論考における家族論およびシェリングの『世界の暦年』にも言及するが(TI, 299)、それらに対する立ち入った考察をなしてはいない。こうした理由から、レヴィナスにおける「繁殖性」の議論の哲学史的な位置づけを確定する作業は困難に陥り、そうした問題を扱う二次研究もいまだ乏しい。本稿の範囲では、レヴィナスとユダヤ教、あるいはレヴィナスとドイツ観念論という主題に立ち入ることをせず、『全体性と無限』で述べられる「繁殖性」の議論を再構成したい。

我〉を繋ぐものは、「権能」ではない。常に新たに「他なるもの」を産出するということ自体が〈自我〉の新たな意味での自同性を可能にする。レヴィナスは「繁殖性」に〈自我〉の存在様態を見いだすことで、〈自我〉の「死」を虚無に帰するのではなく、〈自我〉の「死」を介した「未来」を開く。「繁殖性は老いを産み出すことなく歴史を継続する」(TI, 301)ということの内実がこうして理解される。〈自我〉は予期によって汲み尽くし得ない「未来」において自らを再開する時間を生きている。「繁殖性」が「死に対する勝利」(TA, 85)であるのはこうした意味においてである。

レヴィナスは「繁殖性」の時間の議論において、「子」として生起する〈他者〉の——〈自我〉の刷新に関わりその意味における自同性の創出に伴う——無限なあり方、すなわち、〈自我〉を絶えず超出する〈他者〉の無限を論じる。〈自我〉は自らに対する〈他者〉でありながら、なお〈自我〉であり続けるのだ。権能を持つ〈自我〉の未来——〈自我〉の可能性としての未来——とは異なる〈他者〉の未来を絶えず再開することで、「繁殖性」は無限に〈自我〉を生起させる。「無限に存在することが生起する場としての時間は可能事の彼方に赴く」(TI, 314)。「繁殖性」の本義は〈自我〉を不断に産出することに存しているのであり、〈自我〉は絶えず自らを超出する〈他者〉でありつつもなお〈自我〉である。このことは、〈自我〉の刷新的なあり方としての「無限化」という運動に「繁殖性」が存していることを示してもいる。「無限」の観念が常に到来するということは、〈自我〉であることが絶えざる自らの刷新に存していることなしに生じえない。「繁殖性」という時間のもとで、父子関係と呼ばれる〈自我〉と〈他者〉の関係が生起している。したがって、「繁殖性」は〈自我〉の無限的なあり方に関わるだけでなく、〈他者〉の「無限」を思考することをも可能にしていることになろう。こうして、「無限化」という運動が〈自我〉の存在の仕方であることを確認しうる。

3-3 「無限の時間」と「平和」

最後に、「対面」における責任主体としての〈自我〉について、この「無限化」についての議論から再考することで、最終的に「平和」の意味を検討したい。「対面」に関する議論において、レヴィナスは〈自我〉に呼びかける〈他者〉が「無限」

であると論じている²⁸。レヴィナスは第一に〈他者〉の企図の〈自我〉に内在する思考への翻訳不可能性から〈他者〉の無限なあり方を認める。ただし、〈他者〉の無限性を単に〈自我〉による〈他者〉の内包不可能性として捉えるのであれば、自他の間に生じる「対話」の内実が失われてしまうだろう。〈自我〉の「対話」への参入は、〈自我〉の「呼びかけ」に対する「応答」によって終わることがない。なぜなら、「呼びかけ」への「応答」は〈他者〉の言説を聴き入れること条件であるとともに、「対話」が既に開始されていることを告げてもいるからである。「倫理的関係」は「言説を支える」(TI, 213)のであり、「言説」は「本質的に超越的であり続けるものとの関係をなす」(TI, 212)。はじめの応答によって、〈自我〉は言説に参入するが、対話において、〈他者〉は「自分を包摂していた被措定項から離れてしまっている」(TI, 212)。このことは、「対話」は、運動としての性格、それも、先立ってなされた「迎え入れ」を前提とする時間的性格を有することを示唆している。

こうした「対話」の時間的性格は、「繁殖性」の分析によって得られた〈自我〉のあり方に支えられているのではないか。レヴィナスは「繁殖性」の議論において、「善さ」に言及する。「無限の時間」とは、「諸世代の非連続性を貫くより善きものである」(TI, 301)。彼は、父子関係として論じられる〈自我〉に「善さ」という価値づけをなすのである。

超越——他者に対して——顔と相関的な善さは、より深い関係、つまり、善さに対する善さを基礎づける。繁殖性を産出する繁殖性が善さを達成する。(TI, 302)

注意すべきであるのは、「顔」によって述べられる〈他者〉との関係、すなわち「対面」の問題が「繁殖性」の議論の中に挿入されていることである。レヴィナスによれば、〈他者〉と〈自我〉との「対面」という関係、すなわち「顔」と相関的な「善さ」は、「善さ」を産み出す「善さ」を基礎づける。「善さ」は〈他者〉との対面において生起する〈自我〉のあり方について述べられるものであった。彼は、「善さ」それ自体を規定するのではなく、産出の運動において「善さ」が生じると解してい

²⁸ Cf. TI, 256. 本節が対象としているのは、その内容をより詳細に説明する第三部 B「顔と倫理」第一節「顔と無限」である。

る²⁹。常に自らを常に超出し、自らが〈他者〉であるような〈自我〉(「繁殖性」の時間の〈自我〉)は、〈他者〉と「対面」する〈自我〉に他ならない³⁰。このことは、「繁殖性」が「対面」を——「平和」を——可能にするとレヴィナスが考えていることを意味してはいないだろうか³¹。

彼は、「繁殖性」の時間において「善さ」が生起するというを、戦争および戦争の不在の条件としての「平和」の根源性の最終的な意味として提示する。

平和は、自我から発して〈他〉へと向かう関係、つまり欲望ならびに善さにおける自我の平和でなければならない。善さにおいては、自我は現出すると同時に自我中心性なしに実存する。道徳性と現実性との収斂を確信する自我、言い換えるなら無限の時間を確信せる自我を起点として、平和は思い描かれる。繁殖性を介した無限の時間、それが自我の時間である。(TI, 342)

この文脈において、「平和」とは〈自我〉がその自我中心性を失いつつも〈自我〉を出発点として〈他者〉と関係することであると述べられる。レヴィナスが「戦争」を「現実」として位置付けていたことを思い起こそう(TI, 5)。戦争のうちでは道徳性と現実性が乖離する、とレヴィナスは述べていた。「現実性」は過去をはらみ、過去に基づく「現在」に存している³²がゆえに「道徳性」と対立する。それに対して、レヴィナスは、〈他者〉との関係を、〈他〉が無限に〈同〉を超えゆく時間のうちで

²⁹ ジャン＝ミシェル・サランスキは、レヴィナスの歩みにカントの第二批判との親近性を見てとる。カントにおいては、「当為の根本的な定式(定言命法の定式)は確かに詳述され、異議が唱えられてきたが、それでもなお考えなければならないのは、善が、存在の次元で、倫理の普遍的で合理的な厳格な要請を選択する者へと回帰するのはどうしてかという問題である」(『顔とその彼方——レヴィナス『全体性と無限』のプリズム』知泉書館、合田正人編、2014年、九頁)。同様にレヴィナスは、「主体を有限性や存在の地平への幽閉から救い出すものが何かを見定めようと企てている」(同上)。

³⁰ 「対面」における〈他者〉と「繁殖性」における〈他者〉との関係については『全体性と無限』で明示的に論じられていない。この点に関して、本稿においては、〈他者〉の両義性と自己関係の多様性を指摘するにとどめたい。

³¹ レヴィナスは「対面」を「存在の根源的生起」とみなしている(TI, 341)。「繁殖性」と「対面」の根源性は、「対面」における〈自我〉の生起の構造において対立することがない。

³² 「繁殖性による存在との隔たりは単に現実のうちで開かれるものではない。この隔たりは現在そのものに対する隔りである。ここに言う現在とは、その数々の可能事を選択する現在であると同時に、すでに実現されある意味では老いた現在の謂である。それゆえ、この現在はすでに決定された現実性の中で凝固し、すでにその数々の可能事を犠牲にしている」(TI, 314)。

提示する。このことによって、「現実性」と「道徳性」は〈同〉の「死」と新たなものの到来の運動の両方を含意する「繁殖性」において収斂する。「平和は必ずや到来するという確信」(TI, 6)は、「繁殖性」の時間構造に存しており、こうした「確信」は自らを刷新する〈自我〉によって抱かれるのである。こうして、「繁殖性」が「平和」の意味を担うことが明らかになる。言い換えるならば、〈自我〉が〈他者〉であるような二重の時間の創出に「平和」が存することが明らかになるのである。

結論

本稿は、『全体性と無限』の「平和」論を検討してきた。その中で、〈他者〉と対面する〈自我〉が否応無しに〈他者〉と平和的關係を築いていることの内実を確認し、こうした自他関係についての分析における「繁殖性」の役割を明らかにした。「対面」についての議論の中核としての「責任」と、「繁殖性」の問題における「無限の時間」の意味がいまや結びつく。『全体性と無限』において、「繁殖性」は、「平和」を可能にする「無限」の時間の創出を担っており、「無限」の時間こそが、〈自我〉の二元的な存在の仕方を可能にしている。「応答」する「責任」主体としての〈自我〉は、こうした時間のうちに生起している。

『全体性と無限』後のレヴィナスは、『全体性と無限』において〈自我〉と〈他者〉の時間的隔たりについて論じていた事柄を別の仕方で論じるようになる。しかし、彼の後期の時間論は「繁殖性」を別の仕方で論じたものに他ならないと考えることもできるのではないか。このことについては、別の機会に論じたい。